

令和8年6月9日(火)～9月13日(日)

歴史特集展示「二・二六事件と昭和」

展示資料「尊皇討奸ノ記 (SPM1983-0161-0002)」翻字

このwebページは、令和8年度歴史特集展示「二・二六事件と昭和」に展示された、叛乱軍として参加した埼玉出身の兵士が、事件直後の軟禁中に備忘録として記した「尊皇討奸ノ記」の翻字を掲載しております。

展示資料と翻字を合わせてみることによって、生の筆致を感じるとともに、内容を読み取っていただければと存じます。

【翻字についての凡例】

- ・改行・当て字については、そのままとした。
- ・書き損じについて、取り消し線の下が判読できる場合は可能な限り読み取り、二重線を施した。判読不能な場合は「||」であらわした。
- ・補入については、「()」で補入箇所の中に入れた。

尊皇討奸ノ記

二月廿五日夜半突如、非常呼集の声は響いた。毛布を跳つて飛び出し作業衣袴に身を固めたが何んだか今夜の非常呼集は変だ何時もなら喇叭の号音が聞えるのだが不寝番が非常と呼んで居るのみでさつぱりわからない。が本室に集合した、

時は廿六日午前一時四五分であつた、

班長上村盛満軍曹が命令を達す、大要は左の如し、

「聯隊は相澤中佐の件にて、帝都が動揺して来たから直ちに帝都の警備につく、

と云はれ続いて左の如き注意中もを加へらる

「皆落付いて、あわてず日頃の腕前を見せるのは此の時だ。しっかりやれ、又上官の命令に服従出来ぬ者はな

いか、あれば此の場にて切殺すから手を上げろ

——と云つた、殺氣立つた、全員は只注目して居るのみだ

更に言葉を加へ強め「絶対服従出来るかと」と云へば班内

は割れんばかり一声に「ハイ」と返事をした、

直に編成を開始し、身体の強い者のみを選んで四ヶ分隊

編成した、自分は福田二等兵が行けなくなつた為交代して

第三分隊に加り分隊は左の通り編成さる、

分隊長 松川彦造

一番銃手 神谷 昇五番弾薬手 伊藤鶴吉

二番銃手 戸澤芳郎 六番弾薬手 村井喜雄

三番銃手 斎藤弥一 七番弾薬手 木暮銀蔵

四番銃手 種村光衛 八番弾薬手 奥 幸雄

小隊長を上村盛満軍曹とし、第六中隊に配属すべく命を受けて
服装は外出時の服装に巻脚絆を穿き防毒面携行普通実包
各銃五百四〇発、携行

午前二時三〇分服装は整つた、愈々班内を出る直前になつて更に班長殿
より(左の如き)注意があつた、

「皆は死んで帰へるのだ各自は貴重品を持つて行け又班内全員で
顔を見合わせるのも最後だから残留員の顔を良く見て置け、
と云はれたが見合はず暇もなく中隊舎後に整列第六

中隊に配属中、隊長安勝大尉殿より左の如き注意を受く、
「只今より警備につく為九段坂に向つて出発するだが外出
気分が良い直ちに出発、

時に午前三時三十分歩武も静粛に営門を後に出発、途中
上村班長は何時もとすつかり変つた気分にて兵隊
と左の如き、話しをしつゝ進む

「俺等は生きて帰へれぬのだ煙草を吸ふ人は吸ひ、そして
ゆつくりした気持で歩け、等と座談的会話を続け
乍ら行進し途中一回休憩し午前五時頃鈴木侍従

長氏宅附近の道路にて止つた、

直ちに機関銃隊は道路警戒を命ぜられ、其の場に銃を据え、
一、 三番銃手は、位置につき、それ以外の銃手弾薬手は帯剣
を抜き、待機、任務は、

「前方二十間位まで来たたら何人たりとも止めろ、命に背く者
は捕獲するか突け」と云ふ事だ

自分は三番銃手にて、実弾の装填してある、機関銃の押鉄に指をふれて居るので撃ちたくてく、たまらなかつたが相手が居ないのでどうにもならぬ、

こんな事をして居る内に小銃隊は鈴木氏宅を、襲撃し同氏に瀕死の重傷を負はせたのだつた、

俺等は道路警備にて獲物と云ふ程の者もなく、二、三名の警官と二、三名の市民を取調べたのみだが子供相手の様だ只一名、少し不審な点があるので裸体にして奥の中上に座らせて居たのは一寸可愛想に思はれたがこれも止むを得ん、こんな事にて我等の仕事は終わつて了つた

午前六時引上げ命令降り途中警戒し乍ら三宅坂を過ぎ陸軍省門前にて止り此処にて安藤大尉殿より今までの我等の行動及内容を聞かされ初めて半信半疑で出勤して来た真実の謎が解けた、其の内容は大體左の如きである、
ゝ我等は官賊財閥を討つたのだからば我等は楠軍であり、我等を攻むる者は足利軍である、其の気持で最後まで戦へ
午前七時三宅坂に引返し、路上に銃を据え警備す、
其の時班長殿より、

ゝ我等の仕事はこれからだ気をゆるめず尚一層頑張つてやれ立哨中に居眠りなどするな

―と注意を喚起された、

歩哨の任務は通行止にて市民を始め総て通する事は許されなかつた、

「歩哨に背むく者は突くか射殺すべし

と云ふ命令だ

間もなく聯隊より自動車にて食糧が来たので各分隊
毎に朝会を済ます時は午前十時

何んにも通らぬ三宅坂の警備は尚も続けられる

其の中に朝からどんより曇つて居た空は遂に綿の如き

雪を落し始めたそれと共に寒さは一層加り、止むを得ず

学校、在郷分会青年団等から天幕を、借り受け寺内元帥

の銅像の前面路上に張り中央に炭をたき車座になつて

立哨者以外の者に出動以来今日までの行動や又今後尚一層

任務が重大な事をば聞かされくよくくせず最後の

一兵になる迄しつかりやれ其のかわり余暇■のある限り

ゆつくりと休めと班長に座談的に云はれたら唯云ふとな

く、最後に最後まで頑張らう兎角腹がへつては戦が出来ん

と云ふ諺がある如く先づ腹を作らうと云へ乍ら

一斉にカンパンを喰い始めた、

午後一時頃安藤大尉殿より「と云つて壽し(すし)を貰ひ、又、午後五時頃

聯隊より、食糧が来たので夕食を済ませさせたが残つたので

各自先を思い飯盆に一杯宛つめて居つた、

兵隊も満腹して警戒も何等変りがないので交代者も

變つて明朗な気分になり、ぽつ／＼雑談に花を咲かせ始めた、

班長もこんな事を云へ出した、

都築と自分を代表的に出して農村出身者は一目で

わかるカチ／＼な顔をして居ると云つたが内心農村出身者を期待して居るらしく何んとなく好感が持てる様子だったが外の者は何んにも感じないのか只笑つた位で終つた

午後七時兵隊の好物は大福か甘食として渡されたが銀世界の間に二十分交代にて立哨では、寝る事が出来ず居眠り位で楽でもない夜半になつて又甘食を貰ふ眠れぬかわり給養が大分良いお蔭で子供の様な兵隊腹具合を悪くするのも恋忘れて喰つて了ふのだからあきれるが可愛い処がある

雪の一夜はどうか明けた別に変わりもないが附近の市民が困つた顔をして表戸を閉ぢて籠居して居るのは気の毒であるが~~それ~~も致し方がない俺等にはどうする事も出来ずない

緊張して居ると、人間なんて案外なものだ雪の中で一夜を明かしても少しも変わらず張切つて警戒して居る夜が明けたので時々まぐれて来るのか円タクが姿を現し一寸止めて調べて見るので夜より一寸張合がある

午前七時頃より軍服着用の将校及陸軍省の記章を附したる文官の通行を許されたそして間もなく一般市民の通行とも許されたので今迄眠つて居た様な道路が急に活気づいて電車自動車も姿を見せやうやく都会の道路らしくなつたが以前として我等は警戒をゆるめず

特に今度は写真を取らせぬ様達せられ、警戒は一層嚴重になった、
徒歩者は何をしてもすぐに解快くわいがつくから良いが自動車の
中にて軍車イクサを撮影されるのが一番悪い動作が早いから少しの
油断も出来ぬ、

新聞記者が二、三回自動車の中から撮影して逃げるを追つた止れと云つても
止らないのでタイヤ目にかけて押お一発ドンと小銃を
撃てば直に止まるすぐに班長殿が車窓に近寄り
写真機を取り原板は滅茶くに破し云ひわけを
云ふ者は、これを引きずり下ろし制裁を加へ追ひ
返した、物見高いは江戸のくせこれを見る野次馬
わんくと云ふさわざである、又この連中を追ふのが
一仕事である

又一方交番の巡查は朝来たまゝ外にも出られず下士官と、
共に、詰所に小さくなつて手持ち不■■■■沙汰に居るのも
気の毒に感ず其の中に隊長より左に命令を受く

「我ヶ部隊はこれより古勝大佐の指揮下に入る、速に新議
事所に終結すべし

直ちに出発、千後ちご一時目的地に到着昼食を済ませ、
未完成の議事堂の廻りで古材木を集め倉庫の雨戸を持ち
来り夜明アツキの準備し、中央に火を置き車座になつた被カ勞
にて皆間もなく居眠りを始めた、何時頃かわからないが起され
たので眠い目をこすり乍ら起き出したら隊長殿より情況
についての話しかあつた大体左の通りである、

「我等の方が有利になつたので此処に引上げたのだ我等の今迄の行動は有利になつたり不利になつたりし乍ら益二有利になつて来たのだ其の上、秩父の宮様が参上致し我等の行動を良いと見とめて下されたのだから大丈夫だ　―と云つた

今日は何事もないので各自思ひ／＼の所でポク／＼と居眠りをして暮らした

午後七時頃安藤大尉殿より(左の如き)命あり

「我等の行動は有利な道をたどりつゝ、唐あつたが益々有利となつたから今晚は山王下の幸樂に行つて安眠せよ、

一同は才寺に行くのではあまり、好感を持ってぬがとにかく休む事が出来るからどんな処でも軍装をといひ起居できる事は、

悦ばしい話である　早速皆整列し健制順に先頭

に尊皇討奸と云ふ吹流しを押し立て、喇叭を吹奏し

威風堂々と行進すれば市民は驚異の眼を見開き彼地

此地の路地に集団し見送つて居る市民を尻目につけ

山王ホテルの前に差しかゝつたら此処にも友軍が約一ヶ中隊位

休憩して居た、我等更に行進と続け一軒の大きな料理の門前

にて部隊は止つた、これが幸樂と云ふのだと云はれた、才寺と

ばかり思つたのが堂々たる料理屋なので驚き且又悦んで門を

入り脚絆を取つて上(つた其の)時の心境たるやどんなだつたらう想

像以上である　一步踏み込み二度驚いた、暫く女と

云ふ事を離れて居た兵隊ゆひ一層強く感じたのかも知れんが

女中がずらつと並んで居るのだから驚くのも無理ない事でせう

女中に案内され大きな部屋に入ったが何んと云つても多勢ゆひ辛
じて横になる位である、それでも今迄に比すればどんな
にか良い武装を取つて横になり其の上電気ストーブがあるので
空腹より被^マ勞にてうとくして了つた

其処へ中隊長殿姿を現し左の如き激励の言葉を
話しをし兵士を激励した、

「我等は正義の為最後の一兵となるまで戦ふのだ何事も意地と
頑張りだ此処でゆるむと我等か討たれる其の気持でしつかり
やれ今晚は各処でゆつくりと命令あるまで休め、

―と云つた、

出勤して始めて余暇が出来たので各自は変つた事
がたくさんあるので故郷へ知らせ度く便りを書き度
いか何んの仕度もせず出勤したので便箋も封筒
もなくどうにもならず女中さんに依頼してハガ
キ便箋等購入して貰ふので女中さん大忙しであ
るでも兵隊の事ゆひ悦んで買つて来て呉れ

便箋封筒は只呉れた、早速、便りを書き始めたが

一、 二通書いて皆、被^マ勞の為寝て了つた、らしい
自分もそうだったので良くはわからぬがそうだったと思ふ
午後十一時頃突然起されたので出勤と思ひ早速飛び起き
て見たら夕食の準備が出来たと云ふ事だつた、
ホット悦んだ空腹より寝むいのか勝つて居たからだ今まで忘れて
居た空腹を急に思い出し一同我先にと食事に取り掛つた何ん

と云つても大勢ウマイか何にか味も良くわからず二杯食べたら品切れと云ふ仕末それから十分二十分三十分待てど追加の食事はし来らず遂に一人二人と横になり何時の間にか全員横になつて了つた、

翌午前一時銃前哨交代の為起され立哨準備を始めた時追加の食事が来ただが自分には食べて居る余祐マユなく残念乍ら見たただけにどうにもならず立哨した

空腹と被勞にて僅二十分間の銃前哨も相当長時間に感

じられた、やうやく交代し部屋に歸へつて見れば、横になると

ころか足の踏む処もない位にて止むを得ず次の交代者を起

すまで待つて其の後に寝む、横になつて見れば案外眠む

れず子供の様にキヤラメルをなめ乍ら居眠り位にて一夜を明した

廿八日の午前八時頃起床し朝から女中さんの案内にて洗面に行く兎各男

許りの軍隊に突然若い娘さんの案内兵隊すつかり得意になつて了つた

朝の行事も気持ち良く済ませ喰へぎに勝つて居る兵隊朝から女中さんに、

依頼しキヤラメル等買入れ各自ホ、張り乍ら余談に花を咲かせて居る

内朝食になつた食事当番も兵營と異り総て若い女性の接■待にて

食欲も進むのかわからないが真黒な腕は矢の如く四方八方から突き出すので

さすがの女中さんも眼が廻りそうだ物々しい光影を呈し乍らも

無事朝食は済んだので一同広間に歸へつたら小隊長殿来り我等の

現在の状態は左の如く語つた

「豊臣空宮が外堀を埋められた如くに三宅坂に居れば何処から銃を向けても弾丸

は宮城に飛んで行くから手も足も出さず者は無いが其処を引上げたのだから我等は不利だがこんな事には恐れず意地と頑張りで最後まで戦ひ我等は最後の勝利を得るのだ」と云つて兵士を元氣つけ兼更に「志氣團結」必死三昧「最後ノ一兵ニナル迄戦イ」尊皇討奸等と書いた紙に室内四方に張り益に兵士を勇氣がけ其の志氣を吹鼓吹した、其の中で次の命令を待つたが中々なので皆被

勞の為横になりついとうとくして了つた

午前十一時半頃だろう戦闘準備の命は遂に降つた小銃隊は早くも表に出たMGも後を追つて表に出た小銃隊は彼地此地の要所に歩哨を立て殺氣は加つて来た俺等の班長殿は全員に向つて山と積まれたサラシ木綿の傍にて云つた「これが最後だサラシが此処にあるからこれをタスキにして傷傷を受けた時繃帯にする様にしろ」と云つた、

各自云はるゝ俣に白襷白はちまきをした自分は襷に小隊長以下の連名をし終りは「俺等は死んでも心は死なぬぞ」と書いた、

各自の姿を見れば白はちまきに黒く快死奉しと書いてあり戦斗準備は全て整つた

最後だと戦友互いに手を取り合つて「しつかりやらうと云ひ交す

死を覚悟した時の心境普通でも想像だに及ばぬ清

いさつぱりとした処がある、

「班長殿分隊長殿 斎藤は第一番目に射手として立ちしつかり

やります 共に死なして戴きます」と云へば

「しつかりやれよ」と互に差し出した手は何時しか

固く握られて居る、其の時の心境たるや察するに余りあり、

まだ戦斗準備はしたものの、戦斗開始までには余暇

があつた、何もする事なくぼんやりして居た、

ふと、傍を見ると班長殿は、最後の便りだらう一心に書いて

居る、それにまねて僕も書き始めた兵隊は皆書き始め

た、故郷への便り、と云ふよりも書置きと、云つた方が

適当であるかも知れん、

書き始めたがさつぱり書けぬ、何んだか知れぬ気持ち文面は

次の通りである、

「俺は正義の為に悦んで死んで行く後を宜敷く頼む、

只これだけだつた、いくら考へてもこれ以上の文句は出て来ない同

じ文句を三通書き、女中さんに依頼したら

「貴男方は何故今死ぬのですか内地なんかで死なないで外地に

行つて御国の為働いて下さい」と云つたこれを聞いた某下士

官は次の如く語つた、

「外国を討つ前に、内地の国賊を打つてからだ」と云つたら

女中も次の言葉を出さなかつた、

愈々陣地につく事になつた、分隊長よりMGの命の綱と頼む

万能鋏を受取り首に掛け戦友達に云つた

「俺が死んだら万能鋏は俺の首にあるからすぐに取つてかわつて

呉れ、云ひ其の中に最後の水盃を交し始めた其処で班長

殿が地方人より貰つたと云ふ酒を持って来たので酒気を帯びた

全員気分はからりと変り、朗らかになつて了ひ、班長殿音頭にて

軍歌を始めたので次から次へと後を追つて口は歌ひ其の中に、

各自思い／＼の蔭し芸も姿を現し一段と賑に成り
死の眼前に迫つて居る気分は少しも見えぬ、最後に天皇陛下の
万歳三唱、尊皇討奸、万歳三唱し全員部署につく機関銃
我等の分隊は幸楽の門前に銃を据え伏して、一度銃把を握
つたなら再び立たぬ、必死の覚悟、今や遅しと敵方睨らみしつ
かと銃把を握る、

昨夜来より押し掛けた野次馬連は益々其の数を加へたう／＼
通行止めをして／＼ひ電車も自動車も立往生して了つた、
太陽は西方に落ちて一人として帰へらず隊長安藤大尉に
何んとか話しをして呉れとせかむのである、止むを得ず

隊長も姿を現し段上に立てば群集は一斉に万歳を
声を限りに叫ぶ様は天地も亀裂せんかと思はるゝ

其の声の静まるを待つて大尉は静に口を開き次の如く語つた、
「諸氏も知る事先に満州事変、上海事変等にて死んだ兵

士は皆犬死だこれは賊閥が悪いからだ而し此の賊閥の警戒は
嚴重で武器を持たぬ諸氏にはどうする事も出来なかつたので
せうそれを武器を持つ我々が為し遂げただけの事です、

皆様に頼むのは今後我々の心を受けて人口に後援をして呉れこれだ
けだ外に話す事はない、と云つて姿を消した、

群集は承知した如く再び万歳を叫び万足したのか
そろ／＼と歸へり始めた、

其の中に状況かどう変わったのか全員引上げ命令、降つたの
で幸楽の玄関に集結、全員集つた処で最後の演芸会と云ふか

再び開かれた一人、一席五分以内にて始めたか段々と面白く成り空腹も忘れ熱中して居た最中、異様な地方人三名現れた

そして一同に向ひ次の如き事を話した、

「我等にでき得なかつた事を為し遂げて戴きました事

を厚く御礼申上ます、

我々も先に神兵隊血盟団等を出したがいずれも失敗に終りたゞ心の中にて考へて居たのです、

今私達が安藤大尉殿に面会し話しを聞きますればしつかりした計画にて安心致しましたどうぞ皆さん

この元気で頑張つて下さい、

音頭を取りますから万歳三唱してお別れ致します

と云つて万歳を三唱し別れた、

演芸会は後々と続て約一時間にて打切つて夕食になつた、夕食を済ませ、座敷に上らんとしたら何時唯人が準備し

たのか全部畳は裏返しになつて居り土足にて上れる様にしてあつた、夕食後は三人宛交代にて立哨する事になつた歩哨に立つ

て居ると煙草、餅菓子等種々の物を持つて来て呉れる者が相当居つた 別に変る事なく夜は更けて行き、待ちに待つた戦斗準備の二度目の

命は降つた、一斉二（飛び）出し各自定位につくそして互に顔を見合せ今度こそ最後になるのだから何も思い残す事はない大和男子の働き振りを見せるのはこの時だ最後まで男らしく行動しよう

唯云ふとなく聞えた、

俺等も再び同じ処に銃を据えた、友軍は意外に多く変装して

敵状搜索に出る者も又多く闇をついて聞ゆる合言葉其の中に陣地変換の命があり早速扉を閉めて外には少数の歩哨を残し

裏門から出る事になったが雪の細道を二人搬送で全員白樺にて

又ハンカチを加へて静粛行進話しに聞く忠臣蔵を思はせ乍ら

裏の道路に出て整列隊形を整へ静粛行進は続けられた、

静な深夜を破つて時々ボン／＼とと異様な物音何にかと

不審を抱き乍ら行進を続けて居たらそれは俺等の行動を敵に見られ

ぬ様外灯を消すのに忙しく竹竿にて電球を破る音であつた

こんな事を続けて間もなく山王ホテルの裏口についた入つて見

れば相当大きな建物であるか中は兵隊にて一杯だ幸じて

一室を見ひ出し、其処に腰を下ろし、待機する事になつた、

待つ事久しく午前四時頃だらう、居眠りをして居る俺等の

耳許へ起きる／＼声も静かに起すので不審のまゆをひ

そ乍ら眼を開いて見るとそれは、班長殿だつた、

全員起こして車座に集め小さな声にて、

「皆は今迄の行動は良いと思ふか悪いと思ふかと問はれたが兵士達にはわかる筈がない唯上官ノ命令に随つたのみにて何んと返事をして良

いかわからずだまつて居た、

班長は更に言葉を続け

「今迄の我等の行動は悪かつたのだ今夜はヒキヨウの様だが此処を逃げ出す

のだ班長として多くの兵隊を殺す事は出来ない自分は何んと

云はれても皆が可愛いから逃げるのだ其の時は必ず銃口を後方に向け

て窓から逃げ出せ見つかれば射たれる先が射てば我も応戦しな

ければならない歩哨のすきを見て命令を降すから其の時まで眠つたふりをして居れ と云はれた、

一同猿寝入りをして居つたが嚴重な歩哨線は仲々其の時を与へて呉れない

夜は明けて来た、其の時三回目の戦闘準備の命令

は降つた早くも全員陣地についたMGはホテルの全般に陣地を占領したか直きに陣地交換を始め次から次へと銃を据える、

違もなく陣地を換へ何処へ行つてどうするのかさっぱりわからず無中にて駆け廻り其の内に何処をどう歩いた

か何時か歩哨線を突破して居るのに気付いた、

路地を抜け広い道路に出た時は、其処は既に原隊部隊の陣地にて今迄の適地だつた、

忙しい陣地交換も考へて見れば班長の計画であつたと始めて解つた

其処にて武装を解除され高橋教官の指揮下に入る

其の時は廿七九日午前七時頃であつた

其の場合中隊長柿下教官が来られ只、良かったの一言

後は言葉なく泣いた泣いて泣いて泣きぬれた、何んだか知れず皆泣いた此の時の心境とうてい筆舌に表す事が出来ない

其処にて隊にて準備して呉れた食事を済ませ

柿下教官の引率にて今井町軍桐町に着く

午前八時頃分会員の接待にて種々の甘食を馳走になつて

居ると上空を爆音高く飛来して来た飛行機が無数のビラを蒔いて行つた

拾つて見たら

下士官兵に告ぐの言葉で始めて奉勅命令が降つた事をも知り戦友互に良かった〜の言葉の交換である

間もなく出発途中変る事なく午前十一時三十分聯隊に着き週番司令に挨拶をなし内務班に帰へる

残留者と顔を合せた時の嬉しさ、互に飛びつき抱き合つて

悦んだ日時ではわずかに三日二晩であつたが積る話しに限りがない 其の話しの尽きぬ中各自毛布二枚出す様云はれ身の廻りを片付け懐しき五尺の寝台に着い■て早くも夢を追つて居ると不意に起きた何事ならんと思ひば出勤した者は枕と飯盒に日用品を持つて舎後に集合せよと云はれた時に午後九時
班長殿より注意ある

〜皆は取調べを受ける為近衛(歩)第一聯隊に行くのだと云はれた
午後十二時頃まで舎後に立たされやうやく出発 隊互を組んで歩き出したのは良いが眠むいので何処が何処やらさつぱりわからず無中で人の後をついて行つたらどうか止つた所は兵営らしい 一步舎内に入つて驚いた旧式の何んとなく蔭気だ現在の俺等の心境には兵営と云ふよりも獄舎と云ふ様云ひたい位だなぜならば兵舎の周囲には縄を張られ一步も外に出てはならんとの事にて自由に行けるのは洗面所便所位だ何んとなく情ない

自分は第一班の三組にて各自3枚宛の毛布にて夜を明す

午前十一時頃全員舎後に整列シ当聯隊長殿より訓示がある要旨は左の通り
ゞ皆は悪いのではないただ上官の命令に服従したのみだから皆の者は
当聯隊の兵隊と同じに取扱ふから心配せずに時期が来ると待つて居れ
而し面会通信は、禁ず

こんな訓示があつた日課としては平凡だ食べては横になり起き
ては食べそれを無意味に繰返すのみ■で三晩を暮す

午前十時頃になつて特ム莊曹長殿より次の如き事を話さる、

ゞ皆は、すぐ歸へる様仕度をせよ、其の時の嬉れしきも又独特の
味ひだつた我ヶ兵舎は歸へつて自由な身になれるかと思へば身も
心もさつぱりした様だ早くも仕度を終り待つて居ると

午後二時頃呼出しがあり宮庭に数多く立てられた幕舎の中に
一名宛入れられ入口には歩哨が二名立つて居り其の中で取調べを
受けたが何んにも知らぬず上官の命令に服従したのみにて

簡単に終り約二十分位待つて二十名位づゝトラックにて聯隊
に運ばれ■ ■ ■三月一日午後四時三十分懐しの原隊に着いた

其の後は留置の名にて三月廿日まで給料は九十二銭に減給、通信
は禁ぜられた

三月廿日より留置解除にて通信も事ム室の横印を受けて
差出す事を許可さる

留置中の生活筆舌に表す事の出来ぬ淋しきと悲しき
を味つた事はないと云つても過言ではあるまじ

本書は趣味に非らず赤裸々に記し永久の記録にす 著者